



### 巨匠レンブラント

#### オランダ紀行⑤

十七世紀、オランダはそれまでの世界帝国スペインに代わって世界の覇権国家となる。

東はインドネシア、セイロン(スリランカ)を、オセアニア地方はニュージーランド、オーストラリアを、西は北アメリカと南アメリカのブラジルの一部を、アフリカは最南端ケープタウンを植民地化する。

アメリカのニューヨークはオランダの首都アムステルダムにちなみ、ニューアムステルダムと呼ばれたことからつ

つものの、本土は九州とほぼ同じ広さの国になった。それはオランダに限らず、スペイン、ポルトガル、イギリスなどにも同じことが言える。

しかし、オランダには没落した国というイメージを感じない。今でも世界有数の花大国であるのと同時に、偉大な三人の画家を生んだからかもしれない。オランダは絵画の国とも言える。

前回紹介したフェルメールもオランダを代表する十七世紀の画家の一人だ。それ以上に世界の人々が十七世紀を代表する巨匠と認めるのがレンブラントだろう。そしてもう一人、十九世紀に活躍したゴッホだ。

わずか三十七歳で自らの命を絶ったゴッホは十九世紀に活躍したという表現は当てはま

らないかもしれないが、その作品は今も世界の多くの人に愛されている。

さて、司馬遼太郎の「オランダ紀行」を読むと、司馬が絵画への造詣(ぞうけい)が深いことがわかる。司馬は産経新聞の記者だったころ、美術欄を担当し、当時から一流の審美眼を持っていたことで有名だったという。

アムステルダム国立博物館に展示されているレンブラントの傑作中の傑作といわれる「夜警」について、司馬は「オランダ紀行に詳しく書いてある。一六四二年作の「夜警」はアムステルダムの火縄銃組の注文に応じて、市民の自警団を描いた「集団肖像画」である。

絵の大きさを知ってもらうために、係員も入れて写真に収めた。フラッシュを使用しな



レンブラントの傑作「夜警」

ければ写真もOKで、日本の展示会のようにものものしさはなく、ごく自然に絵を見るこ

とができる。ほかの集団肖像画は記念写真のように誰もが正面を向いているが「夜警」に描かれた人物の顔の向きはばらばらである。レンブラントはこうして当時流行した集団肖像画に平板でない、躍動感を生み出したと司馬は解説する。

私は絵の余りの大きさに圧倒されながら、オランダが生んだ天才の絵を見たのである。